

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

ウィーンとベルリン：「啓蒙」をめぐる論争：
ヨハン・フリーデル『ウィーンからの手紙』とその
反論文書をめぐって

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2003-09-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山之内, 克子, Yamanouchi, Yoshiko メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/802

This work is licensed under a Creative Commons
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0
International License.



ウィーンとベルリン: 「啓蒙」をめぐる論争

—ヨハン・フリーデル『ウィーンからの手紙』

とその反論文書をめぐって

山之内 克 子

1. 諍論の背景

ヨーゼフ二世統治期におけるウィーンの文芸の特色を、文化史家グスタフ・ゲーギッツは、いみじくも次のように論評した。

「ヨーゼフ期の啓蒙主義的文書の歴史とは、オーストリアにおける検閲の歴史と同義に解釈すべきものである。…数少ない知識人たちが、政府による厳しい管理と抑圧のもとに、人目を忍び、辛うじてプロイセンの錚々たる作家と文通を交わし続けた、あのマリア・テレジアの治世のあとで、あまりにも突然に、ヨーゼフによる寛大な新検閲法が現れた。これは、婉曲な形ではあったが、まさに、啓蒙のための戦闘開始の合図であり、こうして、これまで旧態依然として祈祷書や聖人列伝、頌詩ばかりを世に送り出してきたウィーン
の文芸界に、まるで雨後の筍のように、作家や文筆家が群をなしてそのデビューを飾ることになった」⁽¹⁾

マリア・テレジアは、自ら近代的国家改革に先鞭をつけながらも、結局は、終生、旧来の諸制度の枠組を脱し得なかった。1780年、女帝の没後、予てから新しい啓蒙主義的統治を標榜したヨーゼフ二世がその後を襲ったとき、首都ウィーンは、稀にみる多幸状態を迎えたという。「臣民の幸福だけを目的に統治する哲学王」の美名を恣にしたヨーゼフは、教育制度、教会問題から地方農村部の統治組織に至るまで、あらゆる分野に及ぶ改革を急速に推し進

(1) Gustav Gugitz, Johann Friedel. Ein literarisches Porträt aus der josephinischen Aufklärungszeit, in: Jahrbuch der Grillparzer-Gesellschaft, Jg. 1905, S.186

めた。久しくカトリック教会、とりわけイエズス会の強い影響力のもとで、蒙昧のままに取り残されたオーストリアの地に、啓蒙君主の手によって、ほどなく、理想の国家と社会が実現されるであろう。帝国内ばかりでなく、ヨーロッパ全土で、いつとき、誰もがこのような期待を抱くことになった。

このとき、「啓蒙の理想郷」への精神的な高揚をさらに掻き立て、広い社会層へと伝播させるメディアとしての役割を果たしたのもこそ、首都で大量に発行された印刷物にはほかならない。ゲーギッツがいう検閲緩和は、数世紀にわたる知識と学問の遅れを挽回すると同時に、自らの改革の精神を広く伝えるという明確な政治的意図をもって、ヨーゼフがほぼその即位と同時に導入した政策であった。⁽²⁾ 首都の書籍印刷・出版業は、国内産業に対する保護・育成の側面からも著しく優遇され、市内の業者の数は激増した。⁽³⁾

この出版業の隆盛が、広い読者層と同時に、創作意欲に満ちた作家たちの存在を前提としていたことはいうまでもない。従来 of 厳しい検閲制度の結果、北部ドイツに比肩し得るような「文学」の発展はみられなかったとはいえ、オーストリア、とりわけウィーンでは、すでにヨーロッパの啓蒙思想と文学作品に関する知識を身につけ、新たな時代の流れを巧みに捉えて、ペンによって身を立てようと志す若い文士の数に不足はなかった。⁽⁴⁾ しかも、文筆活動の経験が浅く、未熟なこれらの作家たちが提示したテーマやスタイルは、彼ら

(2) 検閲緩和と出版物の政治的利用に関しては、拙稿「18世紀末ウィーンにおける文芸と出版—アロイス・ブルマウアー『オーストリアの啓蒙と文学をめぐる考察』に関する一試論」、神戸市外国語大学外国学研究、第53巻、とりわけ70-77頁も参照のこと。

(3) 1740年から1787年までに、市内で営業する出版業者の数は5件から24件へと大幅に増大した。Vgl. Peter R. Frank, *Der deutsche Buchhandel in Österreich des 18. Jahrhunderts. Vorgeschichte, ein vorläufiger Bericht über die Forschung und Ausblick*, in: *Das achtzehnte Jahrhundert in Österreich*, Jg. 1992/93, S.111

(4) 作家たちの出自については、次の箇所を参照のこと。Leslie Bodi, *Tauwetter in Wien: Zur Prosa der österreichischen Aufklärung 1781-1795*, Frankfurt a. M. 1977, S.91ff. パンフレット・ブームにおいて活躍した文士の多くはもとイエズス会士であった。イエズス会をはじめ、修道会の教育機関においてさえ、18世紀後半には、表向きは禁書であった啓蒙主義文書が事実上は広く流布していた。マリア・テレジア時代までの首都の識字層の中心を占めた元修道士や修練士らは、まさにヨーゼフ時代の知識階層を支えるための重要なファクターとなった。Cf. Paul P. Benard, *Jesuits and Jacobins. Enlightenment and Dispotism in Austria*, London 1971

と同様、「読者」としていまだ成熟段階に達しない首都民の需要に、ぴたりと合致するものであった。単純かつ稚拙な文体と、極度にセンセーショナルな筆致こそが、取っ付き難い政治や経済の抽象的議論ではなく、食生活や風俗、信仰など、生活の日常レベルで、いま「何が起ころうとしているのか」について、その具体的な情報を渴望したウィーンの読者層の、飽くなき好奇心を満たし得たのである。

こうして、伝統を基として書かれ、また、その上に新たに伝統を築きながら、後世に古典として読み継がれていく文学書・哲学書ではなく、日常の情報を皮相的に伝えて、すでに翌日には忘れ去られるような、極度にジャーナリスティックな小冊子、パンフレット(Broschüre)⁽⁵⁾の大量発行が、1781年、首都に未曾有の出版ブームをもたらした。僅か一年足らずのうちに1,172タイトルの冊子が出版され、ウィーンはまもなく、少なくとも書物の発行部数に関する限り、ドイツ語圏出版文化の中心地、フランクフルトやライプツィヒに迫る勢いを見せるようになった。⁽⁶⁾

官僚から家事使用人に至るまで、文字を解するすべての都市住民を巻き込み、「ウィーンにおける啓蒙の実現過程」そのものとまでみなされたパンフレットブームには、しかし、新検閲法公布から約二年後の1783年、早くも沈静の兆しが現れた。ヨーゼフ即位後の熱狂の中で、作家たちは、読者の好奇心を刺激すべく、「啓蒙(Aufklärung)」や「理性(Vernunft)」の語句を操り、皇帝個人についての他愛のない小咄や、カトリック教会と修道院に対する激烈かつ感情的な誹謗・攻撃を繰り返し述べ立てた。しかし、こうした言説は、いうまでもなく、啓蒙主義そのものの本質的理解を促す契機とはなり得なかった。

(5) パンフレットに関しては、拙稿、「啓蒙期ウィーンの都市描写—ヨハン・ペツル『ウィーンのスケッチ』を中心に」、神戸外大論叢第51巻第3号、19-20頁、および、「ヨーゼフ二世期のパンフレット—歴史資料としての可能性」、『創文』、2001年7月号、1-4頁も参照のこと。

(6) Alois Blumauer, Beobachtungen über Österreichs Aufklärung und Literatur, Wien 1781, S.5

啓蒙と改革に関する皮相の情報が氾濫する中で、ゲーギッツが指摘するように、ウィーンの人々は、これらの概念を、「その他諸々の事柄と同じレベルにおいて、彼らなりの仕方で理解していた」。すなわち、首都の読者にとって、「啓蒙」とは一種の流行に過ぎず、彼らはそれを、「(カトリック教会が精進日と定めた)金曜日に肉を食べる行為」とほとんど同義に解釈していた。移り気な読者が、新検閲法ののち二年間に渡って、パンフレット作家が皇帝を賛美し、馴染みの高位聖職者をこき下ろすのを文字通り「読み尽くし」てしまうと、これらの主題は、もはや「暖炉の前に寝そべった犬ですらおびき寄せることは出来なくなった」⁽⁷⁾のである。

1783年から翌年にかけて、パンフレットのタイトル数、発行部数は、ともに、確実に下降線をたどり始めた。そして、これと時期を同じくして、政府内、とりわけ、新法のもとで検閲に携わった教養ある官僚たちの間で、この種の印刷物の評価を修正しようとする動きが現れたことに注目したい。これまで、パンフレットを「取るに足らぬもの」として蔑視しつつも、政治的喧伝のためのメディアとしての可能性を認めていた検閲官たちが、ここで改めてその負の側面を重視するようになったのである。検閲緩和政策が、当初期待されたような、文学と芸術の目覚しい開花へとつながることなく、「反古紙」にも等しいような俗悪な文書を日々大量に生産させる結果を生み出すという現実に対して、首都の上層知識人の間に深い危惧の念が生まれつつあったことの徴証にほかならない。

例えば、1783年11月、司法局から検閲局宛に出された報告書は、「夥しい数で流布したパンフレットの大部分が、その低劣かつ猥雑な内容のゆえに公序良俗を損なう危険性を内包しており、これに歯止めをかけるためには、禁書目録のタイトル数を再び増大させることもやむを得ない」、と指摘した⁽⁸⁾。さらに、翌年には、検閲局内でも、すべての印刷物に「検閲税」を課し、出

(7) Gugitz, a.a.O., S.187

(8) Hermann Gnau, Die Zensur unter Joseph II., Strassburg und Leipzig 1911, S.217

版許可を得た文書に限って前納金を返還するという制度の導入が、本格的に検討された⁽⁹⁾。検閲通過ぎりぎりの、「きわどい内容」の文書に経済的リスクを課すことで、これらの出版に歯止めをかけることがその目的であった。

ヨーゼフ二世に心酔し、新検閲法に乗じて、まさに「啓蒙の伝道師」となることを夢見つつ、首都の文芸界に身を投じたパンフレット作家は、こうして、1783/84年、ひとつの深刻な分段を迎えることになった。皇帝賛美やカトリック教会批判という「切り札」は、もはや読者の関心を惹かなくなっていた。一方、出版活動に関して最大限の自由を保証するかにみえた検閲局も、パンフレットに対してあからさまに懐疑を表出し始めた。この危機に直面にして、これまで、「啓蒙」への熱狂に包まれて、ただ自らの感情と好奇心の赴くままに文章を「生産」してきた彼らは、いま、必然的に文筆家としての本来の有り様を省察し始め、これまで手放しに賛美してきた「啓蒙」と「改革」の本質を問い直すことになったのである。

実際、この転換期ののち、ウィーンのパンフレットには、著しい質的变化が現れている。例えば、主題の点については、ファナティックな教会批判や、日常の風俗・事件に関する皮相的・個別的な取り扱いが激減し、それに代わって、風刺と諧謔の手法を巧みに用いながら、啓蒙主義・国家改革の本質に触れようとする作品が主流となった。

テーマ選択におけるこの大きな変化は、いうまでもなく、作者の立場そのものの急遽な転向の反映にほかならない。すなわち、初期のパンフレットは、恋愛や性の問題など、道徳的にみて「如何わしい」テーマを弄びながらも、基本的には政府の政策路線、とりわけその教会改革に絶対的な支持を表明していた。ところが、83/84年の「危機」を境に、作家たちは、宗教や信仰よ

(9) A.a.O., S.231-234, Siehe auch: Bodi, a.a.O., S.168f. 当案は、この時点では、「出版の自由を損なうもの」として否決されたが、改革政治の自家撞着がいよいよ激しくなった1789年、再び議論の対象となり、実際に施行された。「印紙税」の形で導入されたこの制度は、ウィーンにおけるパンフレット・ブームを事実上終息させることになった。Vgl. auch: Oskar Sashegyi, Zensur und Geistesfreiheit unter Joseph II., Budapest 1958, S.229

りも、むしろ、新検閲法の後ですらいまだにタブーとみられていた政治的問題に対して、最大の関心を寄せるようになった。しかも、その議論において、彼らは、いまや、啓蒙専制支配という所与の枠組みそのものにあえて論及しようとしたのである。

このことが、検閲局、さらには政府と作家との関係を、対立的方向へと変容させたことは、いまさら指摘するまでもない。ゲーギッツがいうように、啓蒙主義文書の歴史をオーストリア検閲史と読み替えるべきとするなら、1783/84年の分界は、作家とその作品に関する個別的研究のみならず、ヨーゼフ二世時代における文芸の機能を社会史的な地平から探求する作業に対しても、ひとつの重要なベンチマークを提供するはずである。ドイツを含めたヨーロッパ全土での「啓蒙のプロセス」を視野に入れながら、改めて自らの立場と役割を問うという、作家たちの新しいスタンスは、啓蒙主義が「上からの改革」という特殊な形態をとりながら、しかも稀にみる急激なスピードで波及しつつあったウィーンで、文芸が占めた位置価値そのものに、間違いなく根本的転位をもたらしたのであろう。

本稿で取り上げるウィーン＝ベルリン間の諍論は、まさにこのような、ウィーンのパンフレットブームをめぐってもたらされた社会文化史的環境に根差したものである。ここでは、1783/84年の転換期を起点として、ヨハン・フリーデルによる『ウィーンからの手紙』および、この作品が喚起した社会文化的反響について考察を進めたい。1783年から86年にかけて、ベルリンの文芸界をも巻き込みながら展開したこの激しい論争こそが、おそらく、ウィーンの作家たちの自己認識と方向転換にとっての、重要な契機のひとつとなったと考えるからである。

2. 『ウィーンからの手紙』

(1) 作品と構成、手法

『ウィーンからの手紙—ベルリンの友人に宛てたさまざまな内容の書簡⁽¹⁰⁾』が刊行をみたのは、首都のパンフレット・ブームが沈静に向かい始めた、1783年のことである。作者のヨハン・フリーデルについて、詳しい伝記的データは伝えられていない。1751年前後、軍人を父としてハンガリーのテメシュヴァルに生まれ、長じてウィーンの東洋学アカデミーに学ぶが、間もなく「若さゆえの過ちを理由に」このエリート養成機関を追われたという。一時、父のとりなしで軍役に就くが、結局、自ら嘆願して連隊を除隊し、その後はドイツやシュレージエンの都市を転々としながら、執筆や演劇活動に専念した⁽¹¹⁾。本作品以前にすでに数本の小説作品を上梓していたが、一方で、エマニュエル・シーカネーダーと深く交友して舞台に立ち、少なくともウィーンでは、作家としてよりは、むしろ俳優として名を知られていたらしい。『ウィーンからの手紙』は、それまではあくまで「多才なディレタント」として活動していたフリーデルにとっての、首都の文芸界への実質的なデビュー作となった⁽¹²⁾。

50通の書簡の形態によって構成された論評、『ウィーンからの手紙』は、テーマの選択、また、作品全体の構想や手法等、あらゆる側面からみて、まさに、ウィーンにおける初期パンフレットの、ひとつの典型とも呼べる作品である。十八世紀における文芸作品の例に漏れず、「序文」の中で、作者と読者、双方の「客観的・理性的で公正な立場」を確認したあと、フリーデルは、自らそのタイトルに謳ったとおり、架空の宛名人を相手に、「さまざまな内容の」談論を展開してみせた。しかし、読者はやがて、作家が、豊富な

(10) Johann Friedel, Briefe aus Wien verschiedenen Inhalts an einen Freund in Berlin, Leipzig und Berlin (=Pressburg) 1783

(11) 伝記的データについてはGugitzによる前掲論文を参照。

(12) Gugitz, a.a.O., S.228

話題を装いながらも、すでに語り尽くされたあのふたつの主題へと議論を集約して行くのを目の当たりにすることになる。すなわち、皇帝ヨーゼフに対する手放しの賞賛と、カトリック教会、とりわけローマ教皇に向けられた激越な攻撃である。

「第一の手紙」で持ち出された皇帝論は、「アジアの専制君主」と対比させながらヨーゼフの人徳の高さを強調し、さらに、その幼少期のエピソード、教育係を情報源とする「伝聞」、父フランツ・シュテファンからの「高貴な遺伝的要素」へと、目まぐるしく焦点を変えながら、「十一番目の手紙」に至るまで、延々と展開される。特に、マリア・テレジアの治世を「盲信と因習に満ちた旧弊の時代」として定義づけ、現政権との鮮やかなコントラストを描き出す手法において⁽¹³⁾、フリーデルは、新検閲法以来、パンフレット作家たちによって繰り返し試みられた「皇帝賛美」の形式を、忠実に踏襲した。

さらに、「十二番目の手紙」の冒頭で、フリーデルは、「このテーマに触れずして、ヨーゼフによる尊き行為の真価は語れない」と称しつつ⁽¹⁴⁾、話題を教皇問題へと巧みにシフトさせる。紀元3世紀、コンスタンティヌス大帝の治世にまで遡って、世俗君主、教皇、司教の権力関係を辿り、また、修道院と信心会の資産計算に基づく具体的な数値を挙げながら、ローマ教皇庁への依存が、国家にどれほどの経済的損失をもたらすものであるかが、縷々具陳されるのである。

序文において、「時のテーマ」を取上げることを約したフリーデルは、結局、この500頁に及ぶ大作の、およそ六割の紙幅を「皇帝」と「教皇」の問題に割いた。「手紙が長くなりすぎたこと」についての丁重な陳謝の言葉とは裏腹に、ここでは、同じ論旨と結論がいつ果てるともなく繰り返されていく。しかし、その過程においてさえ、フリーデルは、平易かつ刺激的な逸話を随所に散りばめることによって、不断に読者の好奇心をそそろうとする。

(13) Z.B. Friedel, a.a.O., S.10ff.

(14) A.a.O., S.83

さらに、時にはラテン語をも交えながら、古今のあらゆる名著や史料から夥しい分量の引用を用いる手法もまた、作品を読み進める読者の念頭に、過去の文献に精通した、博識で教養あふれる作者像を結ぶために、極めて有効な手段であったろう。そして、こうした仕様こそ、まさに、パンフレットという通俗読み物が、広範な読者層の関心をつねに惹きつけておくために、常套的に用いた通有の技法そのものであった。

フリーデルの『ウィーンからの手紙』は、テーマから細かい手法に至るまで、パンフレットブームの中で首都の文士たちが編み出した既定のフォームを、そのまま継承した作品であった。出所不明の、ほぼ創作に近いようなアネクドートの頻用。また、様々な古典作品や史料を、原典に拠ることなく、類書の引用から数ページにわたって書き写すコンピレーションの手法。このように、ただひたすら単純な技巧を弄する文書が、読書界で実際に広く受容されたことは、文筆家グループにとどまらず、ヨーゼフ期ウィーンにおける知識階層全体に通底する弱点、すなわち、教養の浅薄さ、知的レベルの未熟さを徴証する現象にほかならない。⁽¹⁵⁾

しかし、ここで何にもまして注目しておくべきことは、作者が、啓蒙主義の本質そのものを理解することなく、「啓蒙」を壮語していることである。フリーデルが皇帝賛美と教会批判に作品の焦点を定めた理由は、彼の「啓蒙観」が、啓蒙の具現化としてのヨーゼフ二世と、他方、これを阻むアンタゴニストであり、それゆえ容赦なく弾劾されるべきローマ教皇という、単純な対立図式によって支配されていたためである。

(15) パンフレットが内包したこれらの「弱点」は、すでに同時代人によって鋭く指摘されていた。Z.B.: Historisch-kritische Nachrichten von den durch Briefe aus Wien und Berlin über die österreichische Reformation veranlaßten Streitschriften. Entworfen von österreichischen Patrioten aus der Provinz und mit Anmerkungen herausgegeben von I.B.V.A., Mitglied der Alethophilischen Gesellschaft, Breslau und Leipzig 1786, S.2ff. ただし、Bodiの研究以降、今日では、こうした形式上の特色の中に、例えばVolkstheaterとの密接な関わりなど、オーストリア独自の文学的特徴を読み取ろうとする試みが進んでいる。Vgl. Hubert Lengauer, Aufklärung und österreichische Literatur. Zur Anwendung historischer Kategorien in der Literaturwissenschaft, in: Erich Zöllner (Hrsg.), Österreich im Zeitalter des aufgeklärten Absolutismus, Wien 1983, S.178ff.

ヨーゼフ二世による「啓蒙主義的改革」の中心は、とりわけ即位直後の時期には、ローマ教皇庁の影響力排除を目的とする教会政策に置かれていた。信仰をめぐる諸々の伝統的習慣に直接的に干渉することで、庶民層の日常生活をも激変させたその政策過程において、広い読者層に精神的影響を及ぼすパンフレットが、改革の意図を伝える格好の宣伝メディアとなったことはいまさら指摘するまでもない。カトリック教会を激しく論難する初期のパンフレット作品は、まさに、1780年代初頭に現れた、ヨーゼフ政権と作家たちの「蜜月」を象徴するのである。¹⁶⁾

しかし、日々、大量に「生産された」これらの文書は、同時代ヨーロッパの文学・哲学に関して皮相の知識しか持ち得なかった若い文士、さらに大多数の読者の間に、教会批判という、単純かつ一面的な言説の伝播と受容を唯一の「啓蒙の実現手段」と考える、偏った考え方を定着させる要因となった。そして、文芸界を支配したこのような奔流の中に身を置きながら、フリーデルもまた、当時の政治的状况に規定された特殊な啓蒙観を受け継ぎ、それをさらに流布させる、媒介者としての役割を担ったに過ぎない。

フリーデルをはじめ、ウィーンの作家たちにとって、1783年の段階では、ヨーゼフによる啓蒙専制政治や、ラディカルな教会改革という、限定的・個別的な枠組みを脱して、この新思想をより高度の地平から眺めることは、なお困難な課題であったのだ。『ウィーンからの手紙』は、まさに、ヨーゼフ時代のウィーンにおいて、人々が理解した「啓蒙」という概念の域の狭さとその特殊性を詳明する、典型的な作品例といえるだろう。

(2) ウィーン対ベルリン

「啓蒙」をテーマとする印刷物がほぼ出尽くした1783年の首都文芸界にお

(16) パンフレットを、あくまで教会政策を喧伝するためのメディアとして考えたヨーゼフ二世と、これに大きく規定された初期の作家たちの「啓蒙観」に関しては、拙稿、「18世紀末ウィーンにおける……」、70-77頁を参照。

いて、『ウィーンからの手紙』は、まさに月並みな、取り立てて見るべきところのない凡書に過ぎなかった。作者フリーデルがここで、「ベルリンの友人」という架空の宛名人を登場させなければ、本作品はおそらく、大多数のパンフレットと同様、刊行から数週間後には忘れ去られ、もはや人々の話題に上ることすらなかったであろう。

書簡形式や会話形式は、啓蒙期ヨーロッパの文芸では、知識と情報を読者に身近な問題として認識させ、読書行為を通じて「楽しみ」と「教養」を両立させるための手段として、好んで取上げられた。⁽¹⁷⁾『ウィーンからの手紙』の中で、フリーデルもまた、このスタイルを踏襲したのである。ただし、作者が宛先をベルリンに想定したことは、無作為の選択では決してない。ベルリンに住むある教養人に対してウィーンの啓蒙について説き聞かせるという設定は、同種のパンフレットが出版市場に氾濫する中、作品をヒットさせるために作者が考案した、最大のアイデアにはほかならなかった。フリーデルによる「ベルリンへの書簡」という構想が、何よりも、プロイセンとオーストリア、さらには両国の首都の間にゆっくりと醸成されてきた、複雑な対抗関係に依拠するものであったことを看過してはならない。

両者の間に生じた確執は、単に、オーストリア継承戦争とシュレージエン譲渡をめぐる政治的・外交的対立という、特定の、限定された問題として理解すべきものではなかった。1780年代のウィーンにおける、北部ドイツ、とりわけプロイセンとベルリンに対する激しい敵意は、すでに、文化史と精神史の本質にまで奥深く浸透し、知識人たちのアイデンティティ形成のプロセスにも強い影響を与えるようになっていた。

もちろん、ウィーンとドイツ諸都市との間には、宗派を超えて、同じ言語文化圏の都市として相互に交流を育む可能性も存在した。実際、すでにマリ

(17) エンゲルハルト・ヴァイグル著、三島憲一、宮田敦子訳、『啓蒙の都市周遊』、岩波書店、1997年、58-60頁、Vgl. auch: Kai Kauffmann, "Es ist nur ein Wien!": Stadtbeschreibungen von Wien 1700 bis 1873, Wien 1994, S.57f.

ア・テレジア時代から、高級官僚や宮廷人を含め、教養ある人々は、様々な「裏のルート」を通じてトマージウスやヴォルフの著作を入手し、⁽¹⁸⁾ プロイセンの知識人との親密な文通によって、文芸や哲学に関する最新情報に接していた。また、「哲学王」ヨーゼフの即位は、プロテスタント諸邦においても、地元ウィーンと同様の敬意と期待をもって讃えられた。

だが、啓蒙主義が理想としたコスモポリタニズムと広い人的交流の萌芽は、間もなく、ひとりのベルリン人の手によって、一気に根こそぎにされることになる。すなわち、1781年の初夏にウィーンを訪れた著名な出版業者、フリードリヒ・ニコライである。帰郷して2年後、膨大な旅行記を刊行したニコライは、その中で、プロテスタント啓蒙知識人としての立場から、1,500ページ以上にわたる痛烈な「ウィーン批判」を展開した。信仰上の習慣から食生活まで、都市社会で日々繰り返されるあらゆる営みを細部に渡って取上げながら、ニコライは、カトリック圏における盲信と因習の、その救いようのない根深さを指摘した。わずか一ヶ月足らずの滞在期間における個人的体験に基づいて、彼は、賢明なヨーゼフ二世のもとですら、この都市の社会的・文化的「啓蒙」は絶望的に不可能であり、ウィーンはいまだ蒙昧のままに取り残されている、と決め付けたのである。⁽²⁰⁾

ニコライの旅行記は、ウィーンの人々、とりわけ文筆家によって、首都とその文化に対する事実上の「宣戦布告」として受け取られた。その出版直後

(18) マリア・テレジア時代、表向きは禁書とされた書物を入手する手段は多数存在しており、ドイツ啓蒙主義作家のほか、ルソーやヴォルテールも、知識人の間ではすでにスタンダード・ワークとなっていた。Vgl. Bodi, a.a.O., S.108f.

(19) Friedrich Nicolai, Beschreibung einer Reise durch Deutschland und die Schweiz im Jahre 1781 nebst Bemerkungen über Gelehrsamkeit, Industrie, Religion und Sitten, 12 Bde., Berlin und Stettin 1783-1796. このうち、1~5巻がウィーンに関する記述である。

(20) Nicolaiの旅行記において展開されたウィーンに対する文化史的批判については、次の文献も参照のこと。Richard Blinkmann, Nördliche Wien-Reisende im 18. Jahrhundert. Leiden und Freuden unterwegs und am Ziel, in: Winfred Kudszus u.a. (Hrsg.), *Austriaca. Beiträge zur österreichischen Literatur*, Tübingen 1982, S.7ff.; Throsten Sadowsky, *Reiseerfahrung und bürgerliche Mentalität. Das Bild vom josephinischen Wien in den Berichten deutscher Reisender in den Jahren 1780-1790*, in: *Jahrbuch des Vereins für Geschichte der Stadt Wien*, Jg. 1991/92, S.229ff.

から、アロイス・ブルマウアーを筆頭に、ウィーンの作家たちは、カトリック聖職者を誹謗したのと同じ激越さをもって、ベルリンとその文壇に対する「抗戦」を開始したのである。⁽²¹⁾特に、これまで「文化的後進地」の謗りを受け続けた都市が、ヨーゼフ即位と同時に、一転、「啓蒙の聖地」として全ヨーロッパの注目を集めたという経過が、北部ドイツに対する彼らの文化的劣等感を、行き過ぎた地方的愛郷精神^{ロカール・パトリオティスムス}へと変質させていた。作家たちは口を揃えて自らの都市を「ドイツにおける文化的中心地」として称え、ブルマウアーに至っては、他のドイツ諸都市を、「ウィーンの周囲を公転する小惑星」と喩えて憚らなかった。⁽²²⁾

この愚頑なまでの愛郷心は、すでに一世紀にわたる啓蒙主義の伝統を誇った北部ドイツの知識人の目には、まさに度し難いものとして映った。ニコライは、自ら編集した書評誌、『ドイツ図書目録』の中に「ウィーンの出版物」という項目を新たに設けて、地元作家の「自己弁護」に対して鋭い攻撃の鋒を向けた。⁽²³⁾こうして、ウィーン＝ベルリン間の対立は、いよいよその激しさを増していくことになる。

(3) 「ベルリンの友人」

さて、『ウィーンからの手紙』が執筆・出版された1783年は、ニコライの旅行記刊行によって、この「ペンによる戦い」の火蓋が切られたときであった。首都では誰も、「啓蒙の理想郷」としての、ウィーンの新たなイメージを覆そうとするニコライに対して、強い憤怒を燃え立たせていた。4年間のドイツ・シュレージエン遍歴生活を終えて帰国し、「啓蒙」という、著し

(21) Vgl. Norbert Christian Wolf, Blumauer gegen Nicolai, Wien gegen Berlin: Die polemischen Strategien in der Kontroverse um Nicolais Reisebeschreibung als Funktion unterschiedlicher Öffentlichkeitstypen, in: Internationales Archiv für Sozialgeschichte der deutschen Literatur, Jg. 1996/2, S.27ff.

(22) Blumauer, a.a.O., S.52

(23) Vgl. Doris Maria Kohrs, Aufklärische Kritik der Allgemeinen Deutschen Bibliothek Friedrich Nicolais an den Wiener Schriften des Josephinischen Jahrzehntes, Wien, Phil. Diss., 1981, hier bes. S.30ff.

く新味に欠けるテーマを論じることで、文筆家としてのスタートを切ろうとしていたフリーデルは、まさにこの時流を巧みに読み取ったのである。君主の徳性と教皇庁の悪辣さ、さらに、ヨーゼフの改革の正当性を、頑迷で偏見に満ちたベルリンの人々に向けて、改めてアピールすることこそ、知識人にとって必須の課題であった。同時に、ベルリン人という新たな受け手を想定して語られるとき、これらの主題は再び新鮮味を得て、読者の歎心を買うことが出来るはずであった。

このような構想に基づいて、フリーデルは、ウィーンにおける啓蒙と改革の真価を、「ベルリンの友人」を相手に、そしてとりわけ、プロイセン、ベルリンの状況と対比させる形で力説したのである。例えば、ここでの「皇帝賛美」は、つねに、プロイセン王を念頭に置きつつ展開される。フリードリヒ二世は確かに優れた統治者であろう。しかし、ヨーゼフの人格と能力は、プロイセン王を遥かに凌いでいる⁽²⁴⁾。それにもかかわらず、ベルリンでは、ヨーゼフが日々、酒に溺れているなどという、根拠のない醜聞が流布している。人々は、フリードリヒという目映い太陽に目を眩まされるあまり、そのライバルに対しては一瞥たりともくれようとはしない⁽²⁵⁾。作者はこうして、「哲学王」に対してベルリン人が抱く、狭量で不当な嫉妬の感情を強く非難した。

信仰の問題についても、フリーデルは、教皇庁の暴挙を暴き、ヨーゼフによる修道院廃止政策を熱烈に支持する反面、プロテスタント・ドイツの旅行作家たちが、カトリックの信仰習慣や修道僧の装束を細部にわたって論^{あげつら}い、これを嗤うことに激しく反発した。信仰上の寛容政策が導入されて以来、オーストリア人は、プロテスタントの同胞に対して「寛容をもって」接している。にもかかわらず、プロテスタント側からこのような不当な仕打ちを受けるなら、たとえウィーンの人々が暴力的な反応を見せたとしても、それは当然の

(24) Friedel, a.a.O., S.62f.

(25) Ebd.

報いであろう。²⁶⁾

首都庶民層に根強く残存した宗教的因習は、国家官僚や知識人の間でも、教会改革の実現を妨げる最大の要因として、かねてから懸念の的となっていた。これらの事象をかくも情熱的に擁護する行為は、いうまでもなく、改革を支持するフリーデルの基本スタンスそのものを根本から揺るがしかねないものである。だが、ドイツ作家の傲慢な舌鋒を前にして、作者の愛郷心は、このリスクを冒してもなお、ウィーンの優越性と正当性を主張しなければならなかったのである。

ふたつの都市の比較対照は、さらに、精神文化の分野にも渡って展開される。18世紀後半、北部ドイツの文学・思想を支配しつつあった感傷主義の傾向について、フリーデルは、「...胃袋に納めるご馳走が不足しているので、とりあえず、陽の輝く情景に対する感動を、魂のご馳走としてたっぷりと詰め込むというわけなのでしょう」²⁷⁾と皮肉たっぷりに揶揄してみせる。

「わたしたちが娯楽を楽しみ尽くすのに対して、あなた方はそれについてくだらぬお喋りを繰り広げる。わたしたちがワインを飲むとき、あなた方はその美味を歌にして称えようとする。美女がいれば、わたしたちはこれを妻に娶ろうとするわけですが、あなた方は彼女について、ペトラルカ風の長ったらしい詩をひねり出すのです。...さて、われわれのうちの、いったいどちらがより理性的な存在(der Vernünftigere)だといえるでしょうか?」²⁸⁾

風刺に満ちたこの対照的記述は、ニコライをはじめ、1780年代初頭にウィーンを訪れた北部ドイツの旅行作家たちが、異口同音に、当地における物質至上主義を批判したことに対する抗弁として解釈すべきものである。とりわけ、ウィーンにおける食文化の贅沢さ、社会層を問わず蔓延した大食の習慣は、ルター派の禁欲的な伝統の中に生活してきた作家たちにとっては、まさに許しがたい大愚の極であった。これらの生活様式に対して「反理性的」と

(26) A.a.O., S.298f.

(27) A.a.O., S.320

(28) A.a.O., S.323

いう烙印を押しながら、彼らはここに、都市における「啓蒙の不在」の証をみようと試みたのである。²⁹

フリーデルは、こうした批判もまた、実は、北方の人々の嫉妬心に由来するものであることを明証しようと試みた。物質的な豊かさは、決して、理知主義と啓蒙を妨げはしない。それどころか、ウィーンの人々は、手折られた一輪の薔薇にいちいち涙するベルリン人よりもずっと鋭く理性的に、現実の社会を見据えているではないか。³⁰ベルリンから寄せられた不当な「ウィーン批判」に反駁すると同時に、著者は、その住人に具わった稀にみるほどの気前の良さ、外来者に対する親切なもてなし、また、多種多様の、しかも誰もが参加できる「開かれた」娯楽の可能性など、他の都市にはない豊かさの中で、都市ウィーンが、確実に啓蒙の実現を進行させていくさまを描き出そうとした。

『ウィーンからの手紙』において、このように展開されていく「ベルリンに対する反駁」は、今後、文化史研究の枠組の中で、北部ドイツの啓蒙知識人による「ウィーン批判」と照合しながら、さらに詳細に分析を進める必要があるだろう。

ただし、あくまで作品全体の文脈から判断するなら、フリーデルによるウィーン＝ベルリンの比較対照は、一貫した地平から試みられたものでは決してなく、むしろ、目まぐるしいまでの話題転換に応じて、場当たりの挿入されたエピソードに過ぎないことを看過してはならない。50通の書簡の随所にはめ込まれたこれらの抗論は、相互に関連付けられることなく、ときには結論

(29) 例えば、Nicolai, a.a.O., Bd.4, S.645, Bd.5, S.249を参照。Nicolaiのほか、同時期にウィーンを訪れた Risebeck, Sanderら、多くのドイツ啓蒙知識人が同様の批判を展開したことにより、こうした「物質至上主義」＝「啓蒙の不在」という定式は、当時のウィーン批判のひとつのプロトタイプとなっていた。Vgl. auch: [Johann Kaspar Riesbeck], Briefe eines Franzosen über Deutschland. An seine Bruder zu Paris, uebersetzt von K.R., Bd.1, o.O. 1784, S.257ff.; Heinrich Sander, Beschreibung seiner Reisen durch Frankreich, die Niederlande, Holland, Deutschland und Italien, in Beziehung auf Menschenkenntnis, Industrie Literatur und Naturkunde insonderheit, Bd.2, Leipzig 1784, S.464ff.

(30) Friedel, a.a.O., S.321

すら示されぬまま、しかし、愛郷心という共通の心情的トーンを保持して、散発的に繰り広げられるばかりである。『ウィーンからの手紙』は、結局、南北ドイツという、ふたつの対照的な文化圏を深く洞察し、その相違の真の因由に触れようとする地平からは、遠く隔たったままであった。

だが、こうした本質的な考察は、演劇活動の傍らヒットを狙って筆を執ったフリーデルにとって、まさしく着想の埒外のものであったに違いない。著者は明らかに、両地域を対比させる作業に、本作品のメイン・テーマを見出してはいない。作者がここで「ベルリン」を持ち出したのは、ニコライ、さらには北部ドイツ文化そのものに対する反感が広がる中で、より多くの読者を獲得するためのひとつの手段に過ぎなかった。

しかし、皮肉なことに、作品を売り込むための単なる方便として採られた「ベルリン人への手紙」という架空の枠組こそが、このあまりにも凡庸なパンフレット作品を、ほどなくして首都の文芸界における話題の中心へと押し上げることになった。

3. 『ベルリンからの手紙』

(1) フリーデル作品の反響

フリーデルの『ウィーンからの手紙』は、このように、作品自体としてみれば、1783年当時の首都文芸界に何ひとつ新しい話題を提供するものではなかった。実際、刊行当初、本作は、あくまでごく在り来たりのパンフレット作品として受容されたのである。⁽³¹⁾ だが、翌年、『ベルリンからの手紙—現代のさまざまな逆説的状況について、ウィーンからの手紙の著者に問う』⁽³²⁾ が出版されるや、この凡書をめぐる状況は一変した。

(31) Vgl. Gugitz, a.a.O., S.225f.

(32) Anon., Briefe aus Berlin über verschiedene Paradoxe dieses Zeitalters. An der Verfasser der Briefe aus Wien an einen Freund in Berlin, Berlin und Wien 1785 (die verbesserte Ausgabe, erst erschienen im Jahr 1784)

タイトルが示す通り、これは、同じく書簡形式を踏んで、フリーデルの「手紙」に返答するという設定で書かれた作品である。すなわち、ここで綴られた13通の手紙は、「祖国プロイセンを愛する、フリードリヒ二世の支持者」という立場から、フリーデルによる稚拙かつ感情的な議論を細かく分析・検討し、これを論破しようとする試みであった。

ベルリン人に宛てられた『ウィーンからの手紙』に対して、「ベルリンの書き手」から即座に反論書が出されたことは、当時の時代状況の中で、当然、著しいセンセーションを巻き起こした。これらの「書簡」が、まさに、ニコライの旅行記によって触発された両都市間の文化的対立を、極度に単純化された形で図式化したからである。とりわけ、『ベルリンからの手紙』が匿名で出版されたことが、パンフレット読者層の好奇心をますます刺激して、著者に関する様々な憶測が飛び交った。⁸³

『ベルリンからの手紙』発行直後から、ウィーンでは、新聞や文芸誌、パンフレットなど、あらゆるメディアがこぞってふたつの作品を大きく取り上げ始めた。⁸⁴ 読者の熱い注目を集めながら、両者は相次いで増刷され、『ベルリンからの手紙』だけでも5種類の翻刻版が流布し、わずか数年のうちに6,000部以上を売り切ったという。⁸⁵ さらに、翌85年には、フリーデルとベルリンの作者とが相次いでそれぞれの「続編」を上梓して、作品をめぐる論争に拍車をかけた。こうして、ウィーンとベルリンの「往復書簡」は、1786年に至るまでの約3年間、首都文芸界の話題をほぼ独占し続けたのである。

作家同士の個人的対立や感情的議論によって読者の単純な好奇心が煽られ、一種の熱狂的ブームへと結びついていくプロセスは、グーギッツが指摘するように、ヨーゼフ期ウィーンにおける文芸界・読書界の性質そのものを詳明する現象にほかならない。⁸⁶ ここでは、作者と読者がともに、ただセンセーシ

(83) GugitzとBodiは、プロイセンの大衆作家、Carlo Antonio Pilati di Tassuloがこの文書の著者であったと指摘している。Bodi, a.a.O., S.171, Gugitz, a.a.O., S.225

(84) Gugitz, a.a.O., S.226

(85) Bodi, a.a.O., S.171, siehe auch: Historisch-kritische Nachrichten..., S.51, Anm.16

(86) Gugitz, a.a.O., S.228

ンとスキャンダルのみを熱心に追求し、大量に生産された作品は、論述を問題の本質にまで深化させ得ないまま、決して本格的な哲学や文学のレベルに到達することはなかったのである。

フリーデルが仕掛けた諍論に応じることで、ここに改めて一般読者の大きな関心を喚起することになった『ベルリンからの手紙』もまた、テーマ・文体・様式等、いかなる観点からみても、評価に十分耐え得るようなものでは決してなかった。例えば、『一般図書目録』は、この書物を、あくまで「ウィーンの出版物」の枠内で取り扱ったに過ぎない。ニコライら編者は、フリーデルによる拙劣な「ベルリン批判」を糺すという著者の基本姿勢には好意を示しつつも、同時期に出版された他の「高度な」論稿と同じ次元でこれを論評しようとはしなかったのである⁽³⁷⁾。実際、フリーデルに対する抗議文書として手がけられた『ベルリンからの手紙』は、作者の立場とは裏腹に、技法や構成においては、多くの点で原書簡をそのまま引き継いでいた。多様なテーマを明確な脈絡もなく繋げていく手法や、しばしば感情論に陥りがちの不整合な論理展開などは、まさしくフリーデルの仕様そのものである。『一般図書目録』が判定した通り、「芸術としての文学」という地平からみれば、確かに、この作品にはみるべきものは皆無といえるだろう。

(2) 「逆説的状況」としての出版の自由と啓蒙専制主義

しかし、美学的・芸術的な評価の基準を離れて、議論の視野を社会史的・文化史的レベルへとシフトさせるとき、われわれは、この『ベルリンからの手紙』が、ウィーンのパンフレットブームにおいてひとつの時代を画するような、重要な役割を果たした事実を確認することになる。

ベルリンの作家は、13通の架空の書簡を通じて、まず何よりも、ヨーゼフ治世下における啓蒙の展開、とりわけ出版の自由と教会改革に関する多幸的

(37) Vgl. Historisch-kritische Nachrichten..., S.42ff., Anm.14

な感激と期待が、いかに実体を欠いたナンセンスなものであるかを論証してみせようとした。その過程で、作者は、必然的に、政治体制や民衆教育のレベル、精神史的現状など、オーストリアが抱えた様々な特殊事情との関連性の中で、改めて「啓蒙」の本質を問いただしていく。そして、こうした問いかけこそ、ヨーゼフの即位以来、ただ「啓蒙の春」に酔い痴れたウィーンの人々、なかでも、改革を喧伝するという社会的機能を意識しつつ活動を続けた文筆家にとって、彼ら自身の存在意義にも関わるような、重大で深刻な問題提起となったのである。

いうまでもなく、『ベルリンからの手紙』に託された最大の課題は、文筆家としてのフリーデル、さらに、『ウィーンからの手紙』という作品の意味を、外部者の目を通して改めて厳しく評価し、その政治的・文化的媒体としての価値を根本から突き崩すことであった。そのためには、作者は、何よりもまず、新検閲法がウィーンにもたらした「出版の自由」および、その後のパンフレット・ブームに、議論の焦点を絞らなければならなかった。序文に掲げられたひとつの警句は、首都の文芸界そのものが深刻な問題性を内包していたことを、すでに仄めかしている。

「その著作が知識豊富な専門家たちの意に染まなければ、それはすでに良くない兆し。
ただ、もしそれが愚者たちの間で褒めそやされたとなれば、
いよいよもって—そいつを破り捨てる潮時⁽³⁸⁾とっていい」

出版と文芸の問題は、この序文からさらに「第一の手紙」へと引き継がれる。作者はここで、フリーデルの原文を引いて、これに注釈を加えつつ、その議論を詳細に検討しようとする。ウィーンにおける未曾有の出版ブームを、彼は、「フリーデルによる、何とも下品な表現をそのまま拝借して」、「作家たちの腹下しの時期⁽³⁹⁾」と呼ぶ。ただし、フリーデルは、「腹下し」という、

(38) Briefe aus Berlin, S.VIII

(39) A.a.O., S.3ff.

いかにも演劇人にふさわしい、道化的な表現を用いながらも、厳しい検閲の時代の後で、あらゆる印刷物が玉石混交の状態で流布するというこの状態こそが、「刺激的なタイトルに惹かれて書物を手にする庶民層」にまで「よき思想」を広め、彼らを啓蒙していくために大いなる貢献をするのだ、として、全面的にその意義を肯定していた。⁽⁴⁰⁾そして、ベルリンの匿名作家が一貫して激越な攻撃を仕掛けた標的は、まさにこの論点であった。

一切の文学的伝統を欠いたまま、法令文ひとつによって、一夜にしてもたらされた「出版の自由」は、このような重要な課題を果たし得るはずがない。例えば、『ウィーンからの手紙』は、この「腹下し」の結果のひとつとして生まれた作品である。ところが、作者フリーデルは、民衆啓蒙の助けとなるどころか、逆に、「出版の自由」を後ろ盾として、マリア・テレジアとヨーゼフ、教皇ピウス六世、さらにプロイセン王に関する根拠のない秘話・醜聞を垂れ流して読者の低俗な情報欲を掻き立て、ただ徒にウィーンとベルリン相互の敵愾心を煽っているだけではないか。作品の前半を占める8通の書簡を通じて、作者は、軍事から宮廷、教会・修道院政策に至るまで、フリーデルがあらゆるテーマに関して繰り返した「くだらぬお喋り」を例示しながら、ウィーンの出版業者と作家が、現在のところ、ヨーゼフが理想とする「啓蒙主義」を支える伝道者として、全く機能していないことを繰り返し指摘した。

『ベルリンからの手紙』を執筆するにあたって、著者は、「愛国者」としての基本スタンスを強調しながらも、読者に対して、ここでいう「愛国心」は、子供じみた嫉妬心からプロイセンだけを最高善とみるような偏見に陥るものでは決してない、と宣明した。⁽⁴¹⁾作者は、自称するこの「公正さ」に拠りながら、皇帝ヨーゼフが具えた支配者としての優れた徳性を、敬意をもって是認する。⁽⁴²⁾さらに、出版の自由に関しても、これを、啓蒙主義を社会の隅々にまで伝播させるための絶対的な必要条件とみる姿勢を、一貫して崩そうと

(40) Friedel, a.a.O., S.75f.

(41) Briefe aus Berlin, S.Vf.

(42) Z.B.: a.a.O., S.VII

はしない。⁴³⁾そして、これらの認識を前提としながらなお、彼は、宛名人のフリーデル、さらにウィーンの読者たちに向けて、改めて問いかけるのである。すなわち、古今に冠絶した君主のもとで導入された出版の自由が、ここオーストリアにおいて、「啓蒙の波及と実現」という、その所期の目的にいまだ到達し得ないのは、なぜなのか。

その最大の要因を、ベルリンの作家は、当地における文化的・社会的後進性の中にみようとした。出版自由化は、いうまでもなく、国家全体の啓蒙にとって極めて有益な措置である。しかし、その結果、真の意味での学問・芸術の自由が達成され、これがさらに、すべての臣民の生活・思考様式に実質的な影響力を及ぼすようになるには、数世代を経なければならない。プロテスタント諸邦は、ルターによる宗教改革以来、250年をかけてじっくりとこのプロセスを踏んできた。ところが、この間、啓蒙と改革の流れから隔絶されてきたオーストリアが、いま、一瞬にして、われわれドイツ諸邦と同列に立とうとするのは、どだい無理な話なのである。

ヨーゼフ二世は、アウガルテンを都市民に開放して「万人の憩いの場」とすべく、その庭園の整備を急ぎ、苗木を植えるのではなく、郊外部から成木を移植させて、瞬く間に美しい並木を完成させたという。しかし、臣民の精神的な啓蒙についていうなら、皇帝は、アウガルテンでしたように、自らの「善き意図」の結果を、明日にその目で確認する、というわけにはいかないのだ。⁴⁴⁾新検閲法の後、教皇庁に関する夥しい数の誹謗文書が書かれ、実際に広く読まれていたにもかかわらず、1782年春、首都を訪問した教皇ピウス六世が、至るところで都市民の熱狂的な歓迎を受けたさまを見るがよい。長い時間をかけて人々の心にすり込まれてきた盲信は、数十冊のプロパガンダ文書によって簡単に覆されるようなものではない。⁴⁵⁾現在の状況からみて、出版

(43) Z.B.: a.a.O., S.244, S.256ff., S.281

(44) A.a.O., S.245ff.

(45) A.a.O., S.286

自由化政策の導入は、間違いなく、少なくとも10年は早すぎたのである。⁽⁴⁶⁾

オーストリアにおいて「出版の自由」が十分な効果を現し得ない因由として、作者は、この政策が、臣民の「遅れた状態」に一切顧慮することなく、あまりにも性急に導入されたという事情を鋭く突いてみせた。さらに、彼は、これらの問題こそが、出版自由化にとどまらず、ヨーゼフの統治全般に共通する弱点であることを強調しながら、論難を展開していく。ヨーゼフは人徳に優れた、立派な君主であるが、しかし、必ずしも人心をよく理解してはいない。確かに、君主の権限は絶対的であり、その命には誰もが従わざるを得ないであろう。しかし、臣民の現状に目を向けることなく、性急に改革を進めることは、「まだ犁入れも済まない、堅く瘦せた大地に良質の種子を撒き散らす愚行」にも等しい行為なのだ。⁽⁴⁷⁾例えば、迷信と真の信仰との区別すらつかないような段階にある社会で、修道院を廃止し、その財産を国庫に没収する措置に、何の意味があるのか。こうした処方は、人々の心に不信感を植え付けこそすれ、真の宗教的啓蒙に繋がることなど決してあり得ない、と作者は断言する。⁽⁴⁸⁾

この論点は、まさに、啓蒙専制主義という、当時のオーストリアにおける所与の枠組そのものに対して、簡明直截に疑問を投げかけるものであった。啓蒙とは、「より良き社会」を強く求める、自発的な、しかし、何世代もかけた緩徐なプロセスを経て、はじめて実現され得るのである。これを、君主の号令で一気に獲得しようとする「上からの改革」が、1780年代初頭の樂觀主義的雰囲気の中でオーストリア知識人が思い描いたよりもずっと困難で、ほぼ実現不可能に近い課題であることを、作者は容赦なく暴こうとする。

その上でさらに、話題を文芸の問題に戻しつつ、作者は、改めて、オーストリア、とりわけウィーン社会において、文筆家とパンフレット作品が占め

(46) A.a.O., S.280

(47) A.a.O., S.239f.

(48) A.a.O., S.231ff.

た位置価値を評定しようと試みる。オーストリアには確かに、優れた才能が数多く存在する。しかし、彼らはいま、自ら心地よく目覚めたのではなく、「上からの力」によって叩き起こされて、まだ半分夢うつつの中に、「自由」と称されたものの輝きに目を眩まされ、見るべきものを見ようともせず、「ローマ」と名のつくものを手当たり次第に攻撃し、「改革」の萌芽を認めては、それがまだ完成もしないうちに、大袈裟な歓喜の声を上げる⁽⁴⁹⁾。ここにあるものは、「出版の自由」の、あるべき本来の姿ではない。

すなわち、ウィーンの作家たちは、真理からはほど遠い、著しく偏倚した情報を大量に発信することによって、人々の蒙を啓くどころか、社会に著しい価値混乱を引き起こしているのである。まず、人口の大多数を占める庶民層は、これらの文書によってその心を左右されたりはしない。彼らは教皇来訪に狂喜し、いまだに最後の審判の日を固く信じて疑わない。一方、時代の状況に多少なりとも目を向け、啓蒙や改革の問題を意識しようとする人々は、いま、ありとあらゆる書物の洪水に押し流されて困惑し、保守派と革新派の間に、自らの立場を決めかねている。そして、さらに少数の、真に教養ある知的階層の人々は、これらの書物の中から優れた作家と作品を選び出すことに苦心している。だが、あまりにも急激な改革の中で、彼らの視野もまた、皮相的レベルにとどまったまま、真の啓蒙を見極めるまでには至らない⁽⁵⁰⁾。精神と知識・教養におけるこうした分裂と混乱状態こそ、ウィーンのパンプレット・ブームがもたらした唯一の結果にほかならない。

いま、オーストリアの文芸界を支配しているのは、言論の自由でも文学発展の萌芽でもない。文士たちはみな、金を手に入れることや宮廷の歓心を惹くことを目的にペンを執るのであり、熟慮の末、テーマに取り組む者は少なく、ましてや、臣民全体の啓蒙を視野に入れたまじめな作家などは皆無といっている。

(49) A.a.O., S.280ff.

(50) A.a.O., S.303f.

「作家たちは人を立腹させることばかり言ってのけ、有益なことを何ひとつ教⁶¹⁾えてはくれない」

ウィーンの出版ブームは、ここでは、「自分でもよく呑み込めないことを文章にしたがる、一種の伝染病⁶²⁾」として捉えられた。熱に浮かされたように下品な風刺と誹謗・中傷を書き立てる行為がもたらす弊害は、ひとりフリーデルのみならず、ウィーンの文壇全体に帰属する問題として自省すべきものであった。そして、こうして生み出される大量の文書が、啓蒙主義伝播の助けとはならず、むしろそれを阻止する方向へと働くことに、疑問の余地はない。ベルリンの発信人は、こうして、パンフレットが担ったはずの、啓蒙主義のメディアとしての価値・機能そのものを真っ向から否定したのである。

*

さて、このようにしてウィーンの出版ブームの文化的価値を全面的に否定した『ベルリンからの手紙』が、首都の読者によって拒絶されるどころか、まさしくこの地において記録的なベストセラーとなったのは、決して驚愕に値する現象とはいえない。文芸界の極端なセンセーショナリズムに警鐘を鳴らしたはずの本作品もまた、新奇な話題を渴望するウィーンの読者によって、単なるセンセーションとして受容されたのである。「両都市相互の敵対意識を増幅させた」として、フリーデルを激しく詰ったこの匿名の作者も、結果的には、ウィーンとベルリンの「文化的対決」の炎に、さらに油を注いだに過ぎない。首都の文壇では、『ベルリンからの手紙』に対してヒステリックに反応し、感情的な反論文書を刊行する者が後を絶たなかった。

しかし、他方、ここで、「ベルリンの友人」という、ひとりの外部者の視線からなされた「ウィーンの啓蒙」に関する様々な示唆と提言は、一部の作家の間に大きな波紋を呼ぶことになった。1783年から84年にかけて、パンフレットという印刷物は、出版事業としても、また、政治的媒体としても、大

(51) A.a.O., S.285

(52) A.a.O., S.281

きな岐路に立たされていた。そして、読書界に新たな話題を提供した「ベルリンからの攻撃」は、ちょうど、自らの存在意義を問い直し始めていた首都の作家を、出版ブーム初期の多幸状態から目覚めさせたのである。

政府の諸策を無条件に賞賛し、また、伝統的な教会の在り方を悉く貶すことが、果たして「啓蒙主義の実践」なのか。こうした問いかけの中で、作家たちは、やがて、彼らの創作活動にとって所定の環境としてみられていた啓蒙専制主義と「上からの改革」が、すでに深刻な自家撞着に陥っていたことに気づき始める。カトリック教会の諸制度と同様、オーストリアの政治体制そのものもまた、重大な矛盾を抱えていたのだ。作家たちは、次第に、政治的なテーマが、教会批判と全く同じレベルにおいて、自らの論争の対象となり得ることを認識していくことになる。

こうして、これまで、少なくとも政治的なレベルにおいては、あくまで政府に忠実なメディアとしてその存在を容認されてきたパンフレットという印刷物の中に、1780年代後半、確実に、反体制的批判の媒体となる可能性が芽生えていた。そして、このプロセスに照らしてみると、ヨーゼフ治世下における「出版の自由」の問題点を先鋭化して指摘した『ベルリンからの手紙』が、作家の意識変化とパンフレットの質的変容を促進させるための、重要な要因のひとつであったことは、ほぼ間違いないのである。

5. 啓蒙とは何か

ライプツィヒ大学で教鞭をとったクリスティアン・トマージウスが、1687年、世俗語による初の講義予告を通じてドイツ啓蒙主義の最初の礎石を据えてから、すでに一世紀が経過していた。啓蒙主義という新思潮は、多様な、ときには相互に齟齬するような概念をも括り合わせながら、さらに広範な地域へ、広い社会層の中へとその伝播を続けていた。この頃、ヨーロッパの知識人の間では、啓蒙の本質をもう一度問い直し、その拡大・波及のプロセス

で歪曲され、稀釈された部分を修正しようとする動きが広くみられるようになった。1784年、『ベルリン月報』に掲載されたカントによる論考、「啓蒙とは何かという問いへの答え」は、こうした「再定義」の試みのひとつとして、その後の思想史の流れにも大きな影響力を及ぼすことになる。⁵³

こうして、ヨーロッパ全域で、啓蒙思想がその爛熟期からさらに軌道修正の時期へと移行しつつあったとき、都市ウィーンは、ようやく「啓蒙の春」を迎えようとしていた。しばしば「遅れた南部」と称されたように、オーストリアにおける啓蒙主義の伝播は、北部ドイツと比較しておよそ百年の遅れをもって実現した。ヨーゼフ即位後の多幸感に包まれて、多くの知識人が「ドイツ語圏における文化的中心地」を豪語したのは単なる皮相の熱狂に過ぎず、この地の哲学・文学が、啓蒙君主のあまりにも短い治世において、北部ドイツのレベルに達することはついになかったのである。

しかし、それでも、この「南部の後進地」は、1780年代におけるヨーロッパ啓蒙思想の最前線から、完全に遮断されていたわけではなかった。「啓蒙とは何か」という問題は、当時のウィーンでもまた、知識階層の間で共通のテーマとして議論されていたのである。そして、首都の人々をして、こうした問いに目を向けさせたものが、折りしもカントの論考と同時期に刊行された、ただし、人間の理性的成熟という普遍的問題を論じたカントとは、全く異なる次元で議論を展開する、一連の通俗書であったことに注目したい。

1783年から84年にかけて、ウィーンとベルリンの間で交わされた架空の書簡は、文筆家を含めて、首都の啓蒙知識人層全体に、「外からの目」を意識させ、皇帝ヨーゼフのもとに実現された「ウィーンにおける啓蒙主義」を、相対的な視野からいま一度再考させることになった。ヨーゼフ期ウィーンの文芸を取り上げたレスリー・ボディによれば、新検閲法以来、一貫して極度に楽天的な雰囲気にも包まれてきた文芸界が、『ウィーンからの手紙』・『ベ

(53) ヴァイグル、前掲書、220-239頁参照。

ルリンからの手紙』をめぐる論争を経て、急激にその基調を変化させたという。啓蒙専制的統治とは、まさに狐火を追うにも似た、本来、到達不可能な幻の目標であることを真っ向から指摘されたとき、作家たちは、はじめて自らを取り巻く環境の特殊性を意識するようになった。すなわち、ヨーゼフによる出版の自由とは、春先の気まぐれな「雪解け陽気」に過ぎず、一時的に解き放たれたすべての「自由」が、同じく皇帝の絶対的権力によって、間もなく引き戻されることはほぼ間違いない。この認識が、彼らの間に、「自由」がまだ辛うじて存在するうちにすべてのことを書き尽くそうという、一種の強迫観念を生み出していった。⁵⁴

啓蒙専制主義と「上からの改革」に対する懐疑は、文芸界にとどまらず、首都の社会全体に、著しい価値観の混乱をもたらした。それはまさに、オーストリア啓蒙主義の流れを分かち、明らかな分岐点にほかならなかった。⁵⁵「革新的かつ君主に忠実」という逆理の理想に誰もが見切りをつけ、マリア・テレジア以来、近代的国家改革のブレーンとして機能してきた知識階層では、皇帝への心酔と忠誠心を保ったまま超保守の立場に転じる者と、啓蒙思想を脱して、のちの「オーストリア・ジャコバン」に繋がるようなラディカリズムを展開させていく者との間に、確実に二極分化が進行していた。⁵⁶

しかも、混乱していたのは知識人ばかりではなかった。啓蒙の光を掲げて帝国全体を明るく照らし出すはずであった皇帝ヨーゼフもまた、この時期、自らの政策理念に対して、深い当惑の念を抱き始めていたのである。玉座に就いたとき、ヨーゼフが思い描いた「自由」とは、あくまで君主による絶対権力の監督下におかれた、極めて限定的な意味での、いわば「従順な自由」にほかならなかった。しかし、年を経るにつれて、木棺禁止令から賦役農奴制廃止に至るまで、自ら導入した政策が悉く激しい批判と反論に晒されるさ

⁵⁴ Bodi, a.a.O., S.177f.

⁵⁵ Vgl. Ernst Wangermann, Joseph II.—Fortschritt und Reaktion, in: Erich Zöllner (Hrsg.), Österreich im Europa der Aufklärung, Wien 1985, S.41ff.

⁵⁶ Vgl. Bodi, a.a.O., S.245ff.

まを目の当たりにして、ヨーゼフは、「改革」と「自由化」の名のもとに、自分が実際に何を解き放ったのかを思い知ることになったのである。

80年代後半、ヨーゼフ二世は、自ら標榜した「啓蒙主義的改革者」としての立場から、急速に距離を置こうとしていた。皇帝自身の保守化傾向は、さらに、1785年12月のフリーメーソン条令によって、決定的なものとなる。貴族、国家官僚、作家、芸術家など、首都の知識階層すべてを緩やかに結びつける知的コミュニティとしての役割を果たしたフリーメーソン団体を、完全に国家政府の管制下に置こうと意図したこの法令は、まさに、作家たちが恐れた「寒の戻り」の、あまりにも歴然とした予兆にほかならなかった。⁵⁷⁾

このフリーメーソン条令は、一方で、1786年初頭、首都の文芸界に再び活況をもたらすことになる。⁵⁸⁾ ロージュの活動に対する著しい制限は、ウィーンの識字層全体の利害に関わる問題であり、パンフレットという、時事的性格の強い印刷物にとって、格好のテーマとなったからである。

しかしこのとき、作家たちの姿勢は、新検閲法直後のブームのときとは一変していた。以前の楽天主義的な雰囲気はすっかり消え失せ、作家たちは、たとえ高尚な哲学的論争に到達することはなかったとはいえ、『ベルリン月報』に寄稿したドイツの文筆家たちと同様、「啓蒙主義」の本質について熱心な議論を展開したのである。すなわち、1786年のウィーン文芸界での最重要課題とは、「真の啓蒙」と「偽りの啓蒙」とを分かつ境界線を定めることであった。⁵⁹⁾

「上からの改革」とは、果たして、「真の啓蒙」のあるべき姿なのか。この問いに対して、多くの作家が否定的な見解を提示した。ラディカルな改革を前面に押し出しながらも、公布された法令を数ヶ月で撤回するような、一

(57) Vgl. Bodi, a.a.O., S. 227ff. この条例がウィーンの知識階層全体に及ぼした影響に関しては、次の箇所も参照のこと。Edith Rosenstrauch-Königsberg, *Zirkel und Zentren. Aufsätze zur Aufklärung in Österreich am Ende des 18. Jahrhunderts*, Wien 1991, S.280ff.

(58) Bodi, a.a.O., S.230f.

(59) Vgl. Bodi, a.a.O., S.249

貫性を欠いた政策態度。イグナーツ・フォン・ボルンをはじめ、政府に近い立場の知識人による、必死の抗議を一切無視して出されたフリーメーソン条令。こうした統治のありさまを体験した後で、彼らにとっては、ヨーゼフをもはや「啓蒙主義」の体現化としてみなすことは不可能となっていた。

かつてドイツに向けて熱狂的な皇帝賛美をアピールしたフリーデルもまた、その例外ではなかった。1786年に発表された小論文の中で、彼は、君主とは、「われわれと寸分変わらない、二本の手と二本の足に、頭と心臓をひとつずつ具えた、ただの人間に過ぎない」ことを強調し、さらに、「君主たちが、われわれよりもずっと激しく人間でありたいと望むからといって、彼らを特別に崇め奉るとは、単なる媚び諂いではないか!」と訴えた⁶⁰。これが、王権の神性を自ら否定し、「国家の第一の僕」と称した啓蒙専制君主の存在、さらに、彼らが必然的に抱えていた自家撞着に対して向けられた、鋭い風刺であることは、いまさら指摘するまでもない。しかも、フリーデルはここで、革新的論者としての更なる一步を、敢えて踏み出そうとする⁶¹。すなわち、「君主の幸福」が「臣民の幸福」によって条件付けられることを確認した上で、彼は、世論の形成、さらには政治に対する民意反映の必要性にまで言及したのである⁶²。

1786年、「上からの改革」が危機的状況を呈する中で、かつて北部ドイツから投げかけられた啓蒙専制主義への懐疑と批判を、いま、多くのパンフレット作家たちが、改めて自らの問題として取り上げるようになっていた。とりわけ、85年末から、ヨーゼフ・グロッシンガーなど数人の作家によって展開された、「(啓蒙の)可能性・不可能性」をめぐる論争は、出版政策から経済の自由化に至るまで、ヨーゼフのもとで導入された「自由」がいかに不徹底で不完全なものであるかを暴いて、啓蒙専制の支配制度そのものを根本から

(60) Johann Friedel, Historisch-philosophisch [sic!] und statistische Fragmente, mehrenteils die österreichische Monarchie betreffend, Leipzig u. Klagenfurt 1786, S.11 なお、この出版地は明らかに、検閲を通過するための偽称である。

(61) Friedelの急激な革新化に関しては、Gugitz, a.a.O., S.241も参照のこと。

(62) Friedel, Historisch..., S.38ff.

否定した。⁶³ 北部ドイツ、とりわけプロイセンの知識人が、宗教改革にまで遡る「啓蒙の自生的発展」を自らの身上とする一方で、啓蒙思想とフリードリヒ二世の存在との間に何とか折り合いを付けつつ議論を展開したのに対して、⁶⁴ ウィーンの作家たちは、ここで早くも、絶対主義的システム自体に激しく反発しながら、著しい急進主義に達しようとしていた。⁶⁵

かつて、無条件に「政府の宣伝者」の立場に甘んじていた作家たちが、わずか数年のうちに、ジャコバン主義を予感させるような急進的立場に転向したことを、われわれはどのように解釈すべきなのか。多くはイエズス会関係の教育機関で知識と教養を積んだ作家たちが、体制を支持する反教皇権至上主義のプロパガンディストを経て、さらに反体制的革新派へと、目まぐるしくそのスタンスを変転させていったことは、確かに、オーストリアの作家グループがその本質的性格として具えた日和見主義、さらに彼らの思想的脆弱さを明徴する現象といえるだろう。⁶⁶ しかし、このような激しい変化は、他方、他地域で一世紀以上をかけてゆっくりと進行していった社会的・文化的発展過程を、わずか数十年のうちに挽回しようと試みた、オーストリアにおける、あまりにも性急に過ぎた「啓蒙」のプロセスそのものの、特殊性の現れとも

(63) Vgl. Joseph Grossinger, *Unwahrscheinlichkeiten*, Wien 1785; Anon. (Johann J. Fezer), *Wahrscheinlichkeiten, von einem unparteyischen Beobachter entworfen*, Philadelphia (Wien) 1785 この種の、いわばあからさまな反体制文書が発刊に至った経緯には、とりわけ、出版業をあくまで投機的事業とみなし、利潤を見込めさえすれば、検閲不許可を受けた文書であっても地下出版ルートを通じて印刷し、密かに販売した、Georg Philipp Wuchererのような業者の存在が、決定的役割を果たしていた。Vgl. Bodi, a.a.O., S.257ff.

(64) カントを含め、【ベルリン月報】の論者たちは、一貫して、「啓蒙の時代」を「フリードリヒの時代」とみなしていた。ヴァイゲル、前掲書、237-239頁参照。

(65) これらの体制批判は、とりわけハプスブルク帝国においては、必ずしも急進的・革命思想的な立場からのみ寄せられたものでなかったことにも注意しておきたい。ヨーゼフによる画一的・中央集権的支配体制に対して最も激しく反発したのは、諸邦において既得権益を著しく侵害された、地方貴族たちであった。例えば、「可能性と不可能性」をめぐる大量に出版されたパンフレットの中にも、ハンガリーにおける既成の制度を無視して統治が試みられたことに対して激しい非難をぶつけるものが数多く存在した。Bodi, a.a.O., S.266ff., Vgl. auch: Wangermann, a.a.O., S.42

(66) 作家の政治的立場の激しい転換について言えば、さらに、フランス革命後、またとりわけ翌90年のヨーゼフ死去以降、多くの人々が80年代末の急進的な立場を再び離れて「反動化」したことに触れておかなければならない。Bodi, a.a.O., S.365ff. 例えば、80年代の人気作家、Johann Peztlの「転向」に関しては、拙稿、「啓蒙期ウィーンの都市描写...」、40-41頁も参照のこと。

みなし得るのである。

ボディは、1780年代後半、ウィーンの文筆家が、北部ドイツと同レベルの芸術的文学様式を達成し得なかった一方、社会や政治の動きに関していえば、ドイツの作家たちをはるかに凌ぐ、強力なアンガージュマンの志向を抱いていたことを指摘する。⁶⁷⁾ 高度の古典的作品を生み出すことなく、一見低俗ともみえる社会小説や民衆劇の台本にその活路を見出した作家たちは、つねに、都市社会の時流を念頭に置きながら、そこに住む人々に対して情報を発信し続けたのである。こうした視野に立つとき、「啓蒙」をめぐって揺れ動く作家たちの姿勢の中に、抽象的なイデオロギーの展開ではなく、当時の社会の日常的視点から眺めた啓蒙主義の具体的な変遷過程を読み取るという、新たな可能性が生まれるだろう。

5. おわりに

政治体制としての啓蒙専制主義を、風刺や諧謔のテクニックを弄しながら、その本質から突き崩そうとする試みは、とどまることを知らぬ勢いで、ますますエスカレートしていった。改革の不十分さを衝き、「真の啓蒙」を激しく求める議論を目にして、ヨーゼフは困惑し、「彼らはこのうえ何を求めているのだ？（国政改革において）私はいったいどこまで突き進めばよいというのだ？」と漏らしたと伝えられている。⁶⁸⁾ この言葉は、皇帝自身が思い描いた「自由」と「平等」、「改革」の概念が、われわれが今日これらの語を用いるときに依拠する、近現代的な価値体系といかに隔たっていたかを明徴している。

出版の自由は、当初、皇帝や国家官僚が期待したように、啓蒙君主とその政権を称える頌詩を生み出しただけではなかった。それは、まさに、絶対主

(67) Bodi, S.257, Vgl. auch: Bodi, Wiener Volkskomodie und Roman im 18. Jahrhundert, in: Neohelicon, Jg. 1973 3/4, S.129ff.

(68) Zit. in: Bodi, Tauwetter, S.275f.

義的支配にとっての「パンドラの箱」であり、ヨーゼフはそれを開けることで、君主に対するあからさまな人身攻撃を含めて、体制批判という、彼自身想像もしなかった恐るべき「怪物」を解放したのである。

1780年代末、合法・非合法を問わず、あらゆる種類の体制批判文書は、すでに完全に制御不可能な状態に陥っていた。1789年1月、状況を憂慮した法務局と検閲局は、84年に廃案となった「検閲税」を再び取り上げ、ついにその導入に踏み切ったのである。⁶⁹これによって、税金の前納義務とともに、出版手続きが複雑化し、書かれた原稿を直ちに印刷し得なくなったことが、新聞・定期刊行物のほか、パンフレットにとっても、致命的な障害となった。こうして、「検閲税」は、オーストリアにおける啓蒙主義文書の、そのあまりにも短い歴史に事実上のピリオドを打つことになった。

本稿では、1781年の新検閲法発令に始まり、89年初頭に早くも終焉をみたウィーンの文芸、とりわけパンフレットという印刷物の発展過程を念頭におきながら、このプロセスにおける最大の転換点となった1783/84年前後の状況に関して、『ウィーンからの手紙』、さらに、これが引き起こした「啓蒙」をめぐる論争を事例として検証を試みた。フリーデルの著作もその反論文書も、当時すでに疾風怒濤シュトルム・ウント・ドラングの時代へと確実に移行しつつあったドイツ文学の次元からすれば、ほとんど議論に値しない雑文類に過ぎなかった。しかし、オーストリアにおける啓蒙主義全体の流れに照らすとき、われわれは、ここに、啓蒙専制主義という、この地の特殊な状況に対する最初の自己懐疑の動きを見出すはずである。ウィーン対ベルリンという対立図式の中で、ときには著しい感情論に陥りながらも、作家たちは初めて、「啓蒙主義」の問題を全ヨーロッパ的な視野から客観的に考察する可能性を見出した。

1783年から85年に至る3年間に、「ウィーン・ベルリン往復書簡」についての論争を一種の「実験場」として、彼らは、確実に、鋭い批判精神と、作家としての新たな自意識を養っていった。そして、ここに地熱のように溜め

⁶⁹ Vgl. Sashegyi, a.a.O, S.229

込まれたエネルギーは、1786年、フリーメーソン勅令を機に現れた「第二次パンフレット・ブーム」において激しい迸りをみせることになる。

ヨハン・フリーデルは、1789年3月、38歳の若さで病死した。文筆家としてのその活動期間は極めて短く、とりわけ86年以降は、再び演劇活動にその全精力を注いだという。文学者としての鍛錬を積むことなく、成熟もみないまま、さながら夜空をよぎる流星のごとく首都の文芸界を去来したフリーデルの出世作、『ウィーンからの手紙』は、しかし、啓蒙主義文書の歴史において、多幸的熱気に包まれた初期のパンフレットブームと、その後、80年代後半の体制批判の時期とをつなぐ、ごく小さな、だが極めて重要なインテルメッツォとしての意味を持つのである。

(本稿は、平成13～15年度日本学術振興会科学研究費補助金<基盤研究C・課題番号13610457>による成果の一部である)